



はじめに（シンポジウム 震災と社会的排除：希望の復興を求めて）

著者	米田 幸弘
雑誌名	和光大学現代人間学部紀要
巻	6
ページ	244-245
発行年	2013-03-19
URL	http://id.nii.ac.jp/1073/00001949/

はじめに

米田幸弘

現代社会学科では、これまでほぼ毎年のように、シンポジウムをはじめとした文化企画を市民に開かれたかたちで開催している。2012年度は、「震災と社会的排除～希望の復興を求めて」というテーマを掲げたシンポジウムを11月3日（土）に開催した。以下で、今回のシンポジウムの趣旨を簡単に述べたい。

「災害は平等に人々を襲うわけではない」とよく言われる。「平時における社会の格差・不平等の構造が、災害時においてかたちを変えてあらわれる」とも言われる。格差は、震災後の立ち上がりの速さの違いとしてもあらわれる。2011年3月11日に東北地方を襲った東日本大震災も例外ではない。震災復興は、弱い立場に置かれた人々へのしわ寄せをとまなうことが多い。具体的には、女性、高齢者、障がい者、在日外国人、セクシュアル・マイノリティといった人々である。今回の震災においては、これに被ばく住民を加える必要があるかもしれない。「災害弱者」とも呼ばれる、社会的なハンディキャップを抱えた人々が復興から取り残されている現状があるのである。

にもかかわらず、深刻な被害を前に「被災者が苦しいのは皆同じだ」という雰囲気が醸成されるなかで、当事者が声を上げにくく、声を上げたとしても理解されにくい現状がある。もともと生き辛さを抱えた人々が、震災の混乱や苦境のなかで、ますます苦しい立場に追い込まれているのである。もともと社会のなかにあった「格差の構造」が、震災によって別のかたちで露わになったと言われるゆえんである。

今回のシンポジウムでは、マス・メディアがあまり報道しないこのような実態に光を当てた。どうすれば、見えにくい問題を抱えた被災者の状況を可視化できるのか。どうすれば、問題を抱えていても声をあげにくい状況に置かれた被災者にも届くような「多様な支援」が可能になるのか。被災者と向き合い、当事者の声をすくいあげようと活動が続ける人たちを中心に登壇いただき、「多様な支援」のあり方、ひいては「希望の復興」のあり方について議論した。

ここで、シンポジウム当日の流れを簡単に述べておきたい。このシンポジウムでは、4人の講師の方に報告をお願いした。はじめに、遠藤智子氏（一般社団法人 社会的包摂サポートセンター事務局長）による基調講演があった。ご自身が関わる被災者の電話相談窓口に寄せられた悩み相談の事例から、現代の日本社会が抱える根本的な問題がどこにあるのかをご指摘いただいた。

続いて、細谷修平氏（映像作家）よりご報告があった。細谷氏は、東日本大震災の後、仙台のメディアセンターを拠点に被災者や支援活動に取り組む人々の姿を映像で記録する活動に従事されている。ご自身が撮影した被災地の映像資料を交えつつ、被災者とともに震災の記憶に向き合いつつ考えたことを述べられた。

報告の最後に、手話による舞台活動が続けている庄崎隆志氏（俳優・風の市プロデュース代表）と南雲麻衣氏（風の市プロデュースメンバー）によって、被災地で実際に上演してきた手話劇や手話による詩の朗読（宮沢賢治の詩）があった。続いて、南雲氏から被災したろう者との交流について報告があった。

休憩の後、現代社会学科から竹信三恵子氏とロバート・リケット氏の2人によるコメントがあった。2人がそれぞれの報告にたいする意見を述べたあと、報告者を交えた活発な討論へと展開していった。議論の詳細についてはこのあとに収録された記録をお読みいただきたい。

今回のシンポジウムの記録を作るにあたって、登壇者の方には、報告の文字起こしをそのまま載せるのではなく、シンポジウムでの報告をベースに、より内容を深めた本格的な原稿を書いていただいた。討論部分は、シンポジウムの内容をそのまま記録として残してある。この記録が、よりよい被災者支援の在り方を考えるうえで何らかの一助になれば幸いである。

[よねだ ゆきひろ・和光大学現代人間学部現代社会学科専任講師]